

助成年度：2020 年度

[所属] 広島大学大学院 先進理工系科学研究科

[役職] 准教授

[氏名] 水田 丞

[課題]

東広島市西条の町並と酒蔵における水環境に関する研究

[内容]

本研究は、日本屈指の酒どころとして知られる東広島市西条（広島県）の伝統的な町並と酒蔵について、水環境という視点からその特徴や成立過程について考察したものである。特に本研究では、西条の歴史と地理、西条の地割、町並における水路の現状、町並周辺における水系、町並における伝統的な建築物の分布、酒蔵および町家における井戸の分布、西条における町並の成立と水環境という6つの項目から調査・分析をおこなった。

西条の町並は、盆地の北側の扇状地に発達したものであり、江戸時代の西国街道の開削を起源に持つ。明治以降、市街地が拡大し、日本酒の醸造町として発展を遂げた。地割には、二種類が混在する。すなわち、旧西国街道沿いの宿場町には短冊形の地割が連なり、南北の裏側には不整形な地割がひろがっている。水路の形状も地割の特徴に影響を受ける。街道の付近では直線的だが、背後では湾曲したものとなっている。町並の水系は、北西から南西へと緩やかに傾斜した地形にあわせたものである。また、伝統的な建築物の分布も、街道沿いから南側への市街地への発達という変遷過程と軌を一にしている。町並に残る井戸には、町家で用いられたものと酒蔵で用いられたものがあり、大きさが異なる。そして、西条の町並の成立過程は、扇状地の上に田畑が作られ、あぜ道と水路が走っていた農村地帯に、西国街道の開削に伴う宿場町が成立し、さらに近代以降、鉄道の開通を契機とした日本酒の醸造町が発達するという、時代ごとに異なるレイヤーが積み重ねられたものであった。いずれの時代も、地表を流れる水路、そして扇状地の下を流れる伏流水が、町並の発展に不可欠であったことを確かめることができた。